10月事業予定

3日 6街区協議会理事会　22日 常務会

16日 防災説明会　24日 正副会

9月末日現在組合員総数　261社

7日　小松商店加入

10月末現在組合員総数　262社（予定）

うおいちの10月の商品情報を【東京魚市場買参協同組合】のホームページに掲載いたしました。

12月末日でタイムズを解約される方は11月15日までに組合にご連絡下さい。

（左欄下の続きです）

【さかなの動き】タコ 西アフリカ漁振るわず 内販、コスト上昇重しに

（10月15日みなと新聞）

西アフリカのマダコ漁は前年並みのペースで国内への搬入が続いている。商社筋によると、夏漁の漁獲も前年並みだが平年と比べると大幅に少なく、価格やコストの上昇で厳しい状況が続いているという。商社筋によると、モーリタニアつぼ漁の主産地・ヌアディブでは７～８月末までの生産量が３４００トンと前年同期間より９００トン上回ったものの２０２２年と比べて大幅減。一方のトロール漁の水揚げは多くはないという。モロッコでは夏漁全体の漁獲枠が前年比２割増だが、ダクラの水揚げは多くはないという。一方のトロール船は「８月以降は順調で昨年よりは漁獲が良いようだ」と商社筋は期待する。モーリタニア水産物通商協会（ＳＭＣＰ）はこのほど、１１月１１日までの冷凍タコ対日価格（トン値、ＦＯＢ、口銭別途）を公表し、前回（９月まで）の価格から高値の据え置きとなった。一方で為替相場は再び円安が進行しており、商社筋は「物流費などのコスト上昇で価格は前年以上。在庫の消化が進み夏漁の原料だけになれば末端の値上げは避けられない。年末商戦は一定の需要はあるものの、年明け以降は販売数量は確実に落ち込むだろう」と懸念する。

【産地市況養殖】養殖ブリ９００円で動き無し 鹿児島産

（10月15日みなと新聞）

鹿児島県内の養殖ブリ主要産地の中心浜値は今月上旬、前年同月と同額のキロ９００円（中心サイズ３・５キロ）で推移。８月から動きがない。販売状況は「先月と同様、１尾サイズが小さく販売可能な尾数が限られている。例年より販売が鈍い」（産地筋）。現在池については「赤潮による餌止めの影響から計画より１～２カ月分ほど遅い。これからの成長に期待する」（同）。県内の他産地では関係者が「赤潮を免れた地区も夏場の餌の“食いつき”の悪さから成長が予定より遅い。生産者にもよるが、今期は県全域が成長不足傾向」と話す。

【産地市況養殖】養殖マダイ保合い９３０円 愛媛産

（10月15日みなと新聞）

愛媛県産養殖マダイの１０月初旬の産地相場は、ほぼオールサイズでキロ９３０円。相場は保合いで当面、現在の相場を維持するとみられている。愛媛県漁協の担当者は「養殖マダイの相場は、前月と変わっていない。相場は保合い。

（右欄上に続きます）

大サイズが少なくなっている。消費の動きは良くない」と話す。一方、養殖マダイの８月の韓国向け輸出量は前年同月比１５・８％増の４４６トン。金額は１３・９％増の４億３９８９万円。平均単価は１７円安の９８７円だった。今年の韓国向け輸出数量は４月に初めて前年同月の実績を上回った。６月からは３カ月連続の２桁増。４月から月間４００～５００トンの輸出が続いている。１～８月累計でみると、数量が前年同期比９・７％減の３２８７トン、金額は８・３％減の３３億１９２７万円。

【産地市況養殖】養殖カンパチ５０円値上げ １６００円　鹿児島産

（10月15日みなと新聞）

鹿児島県の養殖カンパチ主要産地の基準浜値は１０月、前年同月比キロ１５０円高の１６００円（中心サイズ３・５キロ）で前月から５０円値を上げた。　浜値は２０２２年９月以降、１４００円超の高値相場が継続する。販売について産地筋は「需要に対し在池量が少なく、販売をある程度抑制。夏場の高水温から餌食いが悪く１尾サイズはいまだ小さめ。餌価格の高さからむやみに給餌するわけにもいかない」。他県では大規模な赤潮から、カンパチがへい死した地区があるが「当地区は幸いにも発生なし」（産地筋）。

【消費地市況養殖】豊洲市場養殖ブリ、天然物と競合 成育遅く３~４㌔中心

（10月15日みなと新聞）

１０月上旬、東京・豊洲市場における養殖ブリの中心卸値は前年同期並みのキロ１１００～１０５０円で推移する。入荷ペースは前年並み。高水温や飼料費が高いことなどを背景に成育が例年よりも遅く、サイズは１尾３～４キロが中心。競合する天然物について卸は「北海道産の１尾８～９キロサイズが８５０～８００円の卸値で出ている他、ワラササイズはさらに安い。養殖物から切り替える量販店が出る値差だ」と指摘する。養殖カンパチの中心卸値は１～２割高の１９００～１８００円だった。入荷ペースは２～３割減の水準という。卸は「現在の出荷サイズはほぼ２キロ台。年末にかけては玉の確保が課題になるだろう」と見込む。養殖マダイの中心卸値は１割安のキロ１０００円だった。前月並みで推移した。入荷ペースは１割減であるものの、卸は中旬以降の動きについて「天然物が減る中、相対的に養殖物の引き合いが増す。ある程度は良くなるのでは」と期待する。

（次頁左欄上に続きます）

【豊洲の旬】生鮮サンマ　好調な売れ行きも、後半戦の小型懸念

（10月16日水産経済新聞）

公海での操業が続くサンマは、水揚げが途切れることなく、サイズも１００グラム以上が安定して上場。量販店・スーパーでも扱いやすい規格で、買い気は好調だ。一方、今後の小型予測を案ずる声も聞こえている。東京都中央卸売市場の週間市況によると、一日平均上場数量は、１０月１週目に５３・３トン（昨年同期比４２・８％増、一昨年比７・５％増）と増加。相場も中値キロ６８０円と、落ち着いた。卸担当者によると、「中心サイズは日によって前後するが、４キロ３５～３８入りと鮮魚向けの１００グラム上」「９月の量販店・スーパーの勢いも落ち着き、相場に値頃感が出てきた」と、供給が需要を上回る兆しをみせつつある。それでも、秋の主力商材であり「そのまま店先に並べられる」「脂がまだ強いとは言えないこともあるが、同サイズの魚の中では持ちもよい」と、重宝される理由を話す。

現在（１０日時点）はロシア水域でも操業が可能となり一部漁もみられたが、「似たような品質」だったことから、リスク回避の思惑もあり、公海枠が埋まるまでは公海での操業が中心となる。ただ、水産研究・教育機構の２０２４年度サンマ長期漁海況予報によると、１０月後半からの小型化が予測されており、今後を不安視する声が上がっている。

【さかなの動き】チリ産ギンザケ 内販１０８０で保合い 4/6ポンド為替動向に注目集まる

（10月17日みなと新聞）

１０月上旬現在、チリ産ギンザケ（冷凍ドレス）の内販価格は前月上旬並みで推移した。内販価格は４／６ポンドサイズでキロ１０８０円、６／９ポンドサイズで１０５０円になった。商社は「９月末に現行よりも２０円安い価格だった時期があったものの、為替相場が円安に振れたことにより戻った」と補足した。　財務省令で定める外国為替相場（課税価格の換算）は一時１ドル＝１６０円台の円安になっていたものの、９月２２～２８日は１４２・３円、９月２９日～１０月５日は１４２・１２円まで円高が進行。一方、足元の１０月６～１２日は１４４・２５円、同１３～１９日は１４４・８６円と再び円安に振れ、今後の動向に注目が集まっている。　１０月上旬現在、現地側は４／６ポンドで７・３～７・２ドル、６／９ポンドで７ドルの価格を唱えている。商社は６／９ポンドの現地価格について「１０月ぐらいから水揚量が増える中、価格が上がるとは考えにくい」と指摘する。チリ水産庁が発表した過去５年の月別水揚量をみると、１０月は年間水揚量の１６～１８％、１０～１２月は半分以上を占めてきた。一方、商社は「アジア向けが６・９～６・８ドルで動いていると聞く。大幅に下がるとも考えにくい」と説明する。

【さかなの動き】冷凍スルメイカ類 ペルー アメアカ漁低調 現地相場上昇基調

（10月16日みなと新聞）

商社筋によると、ペルーの１～７月のアメリカオオアカイカ（アメアカ）水揚量は１４万５４１１トンだった。水揚量には波があり、昨年上半期は豊漁となったことから、前年１～７月と比較し７０％減となった。ただ、低調な漁模様が続く中、現地の原料価格は上昇基調にある。チリの排他的経済水域（ＥＥＺ）内でのアメアカ漁は例年１０万トン前後を水揚げするが、今年は約８万５０００トン前後となった。商社筋は、今後ペルーで漁模様の回復の兆しが見られない場合、来年１～２月に新漁が始まるチリ産原料を求める動きが強まるとみる。中国では現在、スルメイカの代替となるアルゼンチンマツイカの相場が上昇している。台湾船によるフォークランド諸島での豊漁を受けて６～７月は相場を下げたが、中国によるスルメイカ新漁が振るわず「原料相場が高値に戻った」（商社筋）。また、９月下旬時点の同国内での小型アメアカ（赤道イカ）原料相場は前月に続き高値水準に。「１～２キロ、２～４キロサイズは在庫が少ない」（同）財務省貿易統計によると、１～８月の冷凍スルメイカ類（マツイカ類、南米アカイカ類など含む）輸入量は前年同期比１％減の５万９１３０トン。

（右欄上に続きます）

養殖ブリ　量安定も浜値安

成長遅れも潤沢、価格にもお得感（10月17日みなと新聞）

今期の養殖ブリは昨年同様、在池量が潤沢。価格も量販店や料理店のメニューとして採用しやすい相場。需要者からみた浜値は比較的安価で“お得感”が強い。同魚は比較的安定した価格と生産量から「安定販売可能な魚」（業務筋）と評価され、国内養魚の主力となった経緯がある。ある量販店バイヤーは同魚を「今冬に向け、最も販売採用しやすい魚の一つ。産地加工体制も万全で人員不足で苦しむ小売業界に最適だ」と評価する。　最大産地、鹿児島県の主要産地では「夏に大規模な赤潮があったが、被害は最小限にとどめた」と産地筋。現在の在池については「赤潮対策の餌止めと夏季の高水温による餌食いの悪さから成長が遅れている。求められる販売サイズに達するのは年末近くになる」。来期については「種苗採捕量は十分。安定した供給量となる見込みで『安定の養ブリ』が継続する見通し」。　また、国内主要産地では、人工種苗採用をさらに拡大する動きが活発化。

（次頁左欄上に続きます）

（前ページ右下欄の続きです）

種苗改良から成長が速く、病気や水温変化にも強い新たな種苗出現も期待できるなど“さらなる安定の養ブリ”に向けた活動が進行している。　一方、養ブリ浜値の指針となる同県主要産地の中心浜値は今月中旬、前年同月と同額のキロ９００円（中心サイズ３・５キロ）と安定の安値推移。しかし漁家経営面では「経費高騰の折、浜値弱含みは痛手。販売が安定すれば浜値はやがて適正値に落ち着くと期待する。まずは販売を波に乗せたい」と産地筋は話す。

養殖カンパチ　減産悩む生産者

池入れ少なく、需要に対し供給縮小（10月17日みなと新聞）

養殖カンパチは今期、池入れ尾数の少なさから需要に対する供給量が少なく、産地は年間を通じた販売の維持のため供給を抑制する傾向が強い。今夏は、九州地区で大規模な赤潮で多くの養カンパチがへい死。猛暑による漁場の海水温上昇から在池魚の成長が大幅に遅れるなど、今期販売計画に大きな狂いが生じている。　近年、種苗確保がブリと比べ困難なカンパチは、将来に向けた生産の維持に不安を持つ生産者が少なくない。これに加え今期は、赤潮と高海水温が追い打ちをかけた形だ。　同主要産地は過去、浜値の激しい乱高下と生産尾数の大きな増減を経験。「不安定な魚種」として取引が減少した経験を持つ。「今期浜値は高値ながら安定傾向。今年は必要とされる１尾サイズを供給できるよう専念したい」と産地筋は話す。

養殖その他ブリ類 ヒラマサ軸、ブリヒラ脚光

（10月17日みなと新聞）

ヒラマサを軸にブリやカンパチ以外の“その他ブリ類”が長崎県や大分県など主に西日本地区で養殖されている。２０２３年の生産量はブリ類中、１割未満の４３００トンとなっている。ヒラマサはブリより高温を好み、特に海面温度上昇が心配される西日本で注目されている。料理ではブリより脂が薄くさっぱりした食味。歯応えもあり、国内では高級食材として扱われる。刺身や寿司他、焼き魚、煮魚、酢の物などブリやカンパチ同様多様な調味に対応するまたブリとヒラマサを交配した「ブリヒラ」にも注目。ブリの脂のりの良さとヒラマサの食感を併せ持ち、高海水温に耐え寄生虫も付きにくい。ブリヒラは自然界でもまれに誕生するが、国内では近畿大が人工種苗を開発。今後の販売拡大に期待が集まる。

（右欄上に続きます）

（左下欄の続きです）

【こちら漁況情報部】生鮮サンマ水温低下南下傾向

９月漁６割増　９５００㌧　（10月18日みなと新聞）

漁業情報サービスセンターによると、９月の全国主要港における生鮮サンマ水揚量は前年同月比５７％増の９４７１トンだった。近海の漁場を大型船が早期に獲った８月からの出足の好調に加え、９月下旬に水温が１３～１４度台へ下がり、魚群が南下し漁獲が続いている。主要な水揚げは北海道・花咲港。１０月上旬の主な漁場は花咲港東北東沖の４１０～５５０カイリ。花咲港南東沖２５０～２６０カイリ付近にも散発的に漁場ができた。１０～１１日のしけ明け以降は花咲東南東２５０～花咲東４１０カイリが主漁場となった。船で１日半程度の場所で、多くの漁船が２～３晩操業している。魚体は２６～２９センチ、体重８０～１１０グラムが主体で、短めだがある程度の脂がのっており味は良い。昨年は見られた２５センチ以下７０グラム以下の混じりも少ない。今後の漁場は花咲港から１日程度の場所に移る見込みだが、沿岸に来遊するサンマは極めて少なく、公海が主漁場になると同センターはみる。また、漁期遅くに来遊する沖合は分布が昨年より少なく、漁期全体の合計分布量は昨年並みと推測。資源そのものは依然低調であることに注意している。

豊洲９月輸入生鮮大物

カナダマグロに高評価　（10月17日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場９月の生鮮大物売り場、輸入物の入荷本数は１１２７本（前年同月１０２１本）で前年同月比１０％増加した。クロマグロは、ほぼ前年並みだったが、天然ミナミマグロがやや増加した。クロマグロ全体の本数は４９６本（前年同月４８３本）で２・７％増。天然物の主力は米ボストンとカナダの北米産で、入荷はともに２１８本と同数となった。ボストン産（同３１８本）は減少したが、カナダ産（同１１５本）は２倍弱に増えた。この他、天然物はオーストラリア産が１８本（同８本）とニュージーランド（ＮＺ）産が１２本（同１２本）あったのみ。養殖物は、ここ数年入荷量が落ちているメキシコ産が３０本（同２本）に回復した。昨年、突発的に入荷したトルコ産養殖物はなかった（同２４本）。　ボストン産は「例年と比べ脂薄」（仲卸業者）との評価から、販売は苦戦。セリ値は、高値はキロ６８００円（同７５００円）、平均値が４８９２円（同４９１７円）と下落した。一方、カナダ産も高値が８５００円（同８８００円）、平均値は５３００円（同５８３８円）と前年比では下げたが、平均値はボストン産に比べ４００円ほど高かった。　月を通して脂のり評価は高く、ボストン産と比べた銛（もり）傷の少なさも評価の対象となった。「今月はボストンを諦め、完全にカナダに狙い絞った」

（次頁左欄上に続きます）

と話す仲卸もあった。ただし、供給が過剰気味になったことや、大間産など国内物の身質が向上してきたことから、下旬に入りカナダ産人気にも陰りが見え始め、３０００円台で売り急がれる場面が見られた。養殖物のメキシコ産は、全数の相場が未発表となった。解体後の歩留まりの悪さが指摘される３０キロ前後の小型が多かったが、今年は大手量販店を顧客に持つ買参業者が積極的にセリに参加する姿が見られ、国内養殖物につられて買われる場面があった。実勢価格はキロ２５００～２０００円とみられる。

ミナミマグロのセリ値伸び悩む　ミナミマグロは天然物のみで、全体で５８５本（前年同月４９７本）と約１８％増加。主力は月を通して安定した入荷がみられた豪産の４２７本（同３８７本）で、ケープタウン産も８５本（同１５本）に増えた。ＮＺ産は７３本（同９５本）に減少した。セリでは、いずれの産地も伸び悩み、豪産の高値はキロ４７００円（同５８００円）、平均値は２８９３円（同３７２７円）。ケープタウン産も高値は５０００円（同５８００円）、平均値が３４２６円（同４０５８円）と下落した。無頭処理による歩留まりの良さで人気の高いケープタウン産だが、「身色は良いが、臭いが気になる」（仲卸業者）と鮮度低下を指摘する声があったことや、買い気の落ちる月末近くに入荷が集中したことも販売不振の一因となった。ＮＺ産はほぼ全数が不成立で、安値で売り急がれた１０本が１０００円で発表された。　**メバチ**は全体で２８本（前年同月４１本）と一段と減少。主力の豪産は１５本（同１６本）と前年並みだったが、ケープタウン産は１３本（同２４本）に減少した。セリでは、豪産の平均値は２０２５円（同１８３１円）と１１％上伸。一方、ケープタウン産の平均値は３３３３円（同２７６６円）と２０％高だったが、上品のみ選択買いされたため、約半数にあたる７本がセリ残った。また、豪産のキハダが１８本（同入荷な

豊洲 生鮮マグロ類月間上場量・相場（輸入、2024年9月）

（単位…数量：本、価格：キロ当たり円）

魚種	産地	サイズ等	当年 数量	当年 高値	当年 中値	当年 安値	前年同月 数量	前年同月 高値	前年同月 中値	前年同月 安値
ミナミマグロ	NZ		73	1,000	1,000	1,000	95	5,200	3,875	2,900
	ケープタウン		85	5,000	3,426	2,500	15	5,800	4,058	3,000
	豪州	天然	427	4,700	2,893	2,000	387	5,800	3,727	2,200
クロマグロ	NZ		12	–	–	–	12	4,000	3,333	3,000
	カナダ	天然	218	8,500	5,300	4,300	115	8,800	5,838	4,000
	ボストン	天然	218	6,800	4,892	4,000	318	7,500	4,917	3,700
	メキシコ	養殖	30	–	–	–	2	–	–	–
	豪州	天然	18	4,900	4,050	3,200	8	4,000	3,350	2,700
	スペイン	養殖	–	–	–	–	1	–	–	–
	トルコ	養殖	–	–	–	–	24	2,500	2,500	2,500
	ノルウェー	巻網	–	–	–	–	3	–	–	–
メバチ	ケープタウン		13	3,800	3,333	3,000	24	4,000	2,766	2,500
	豪州		15	3,500	2,025	1,500	16	2,600	1,831	1,500
	NZ		–	–	–	–	1	–	–	–
キハダ	豪州		18	–	–	–	–	–	–	–

*中値は卸が発表した成立品の平均。残品や未発表品を含む総平均ではない。一本値など相場データが少ない場合は高、中、安値が同値表示
*時事通信社調べ

地中海養殖マグロ　３割増２万５５００トン
今期輸入 搬入長期化、在庫消化進む　（10月18日みなと新聞）

地中海産養殖冷凍クロマグロフィレーの今期輸入量（２０２３年１２月～２４年８月）は前期比２９％増の２万５５０３トンだった。同産の養殖クロマグロは例年前年１２月～５月が搬入シーズンだが、今期は超低温冷蔵庫の庫腹不足などで運搬船の水揚げが遅れ、７月ころまでと長期化した。８月も商社の海外在庫が国内に搬入されたとみられ、異例のシーズンとなった。地中海産がメインとなる養殖クロマグロフィレーは当初の予想を上回る輸入量となった。近年は中国での需要増加で原料価格が高騰し、トロ商材を中心に韓国や日本を経由し搬入されていた。ただ、世界的な物価高で中国経済が停滞し、今期は冷凍商材の買い付けは限定的だった。　昨年は買い付けに対して内販価格が低迷し、商社は逆ザヤの商環境だった。国内消費も低迷して冷凍マグロは脂物、赤身とも在庫が滞留したが、「地中海物の在庫消化は進んでいる」と商社。秋以降は地中海産養殖クロマグロでメニューを組む回転寿司も多い。年末に向けて商社は価格を上方修正しているもよう。１２月から始まる新物の搬入は、運搬船の操業スケジュールが乱れており昨年よりは減少することも予想される。コンテナを使った搬入も引き続き行われるとみられる。

台湾大バチ７５０円維持 インド洋一船買い
上品は市場に不足感　（10月18日みなと新聞）

冷凍メバチ相場の指標となるインド洋台湾船一船買い相場は１０月上旬現在、１本４０キロ上の大バチは先月同時期と同じキロ７５０円で推移している。各サイズとも同月上旬時点では８月から保合い。キハダも同様となっている。東京・豊洲市場の荷動きは「並品、裾物は良くない」と卸。赤身の上品は少なく、高値が付く傾向にあるという。キハダは価格メリットがあり売れは良いものの、年末商戦が近づいている点を懸念材料に挙げた。　脂商材となる冷凍のミナミマグロとクロマグロは搬入があるため、卸は「年末に向けて弾はそろってきた」とコメント。国産養殖は背側に不足感があり、地中海養殖は商社側が年内の新物搬入が限られることを踏まえ、売りを絞っているとの見方を示した。超低温で保管する冷凍マグロは依然として庫腹が不足している。卸は末端消化が搬入に追い付いていないことが、相場維持の要因となっている。地中海養殖物が数は減るものの搬入はあるとみられ、年明け以降も天然物の搬入も続く。卸は「操業コストは上がっており船側の経営も苦しい。マグロ産業の維持が危ぶまれる」と指摘する。大バチ以外の一船買い相場は、２５キロ上がキロ６００円、１５キロ上が５００円、１０キロ上が４００円。キハダも２５キロ上が６００円、１５キロ上が５００円、１０キロ上が４００円。

（右欄上に続きます）

（次頁左欄上に続きます）